

祭りを学ぶⅢ 『第2日目祭り見学会』解説書

(1) ユネスコ世界遺産(無形文化遺産)に登録されました

- ・全国33の『山車(ヤマ)・鉾・屋台行事』祭りが登録
- ・東海三県(岐阜県3つ、三重県3つ、愛知県5つ)で11 全体の3分の1
- ・有名な祭り 京都祇園祭(京都)の山鉾行事
博多祇園山笠(福岡県)・高山祭の屋台行事(岐阜県) など

(2) 尾張津島天王祭のいわれ

- ・6世紀に須佐之男命(スサノオノミコト)が始めた。(真野時綱 尾州津嶋天王記)
- ・13世紀(後鳥羽上皇の御代)に、牛頭天王があらわれ、神のお告げを行った。(市江祭記)
- ・14世紀(1309-1357のいずれか) 尾張津島天王祭の原型となる祭りが始まった。「旧暦の6月15日」の日付
- ・永享8年(1436)に始まったという説。良王君(南朝方)の敵である「台尻大隅守」(北朝方)を討ち取ったという 『浪合記』の記述
- ◎いずれにしる『大祭筏場車記録』によれば、大永2年(1521)に置物についての記録があり、祭りが行われていた。

(3) 尾張津島天王祭の流れ

- ・旧暦6月14日(現在7月第4土曜日) 宵祭
- ・旧暦6月15日(現在7月第4日曜日) 朝祭
- 旧暦6月15日(現在7月第4日曜日)の深夜 神葎流し神事
- ・宵祭(試楽) 津島五車(今市場・筏場・下構・堤下・米之座)
 - 午前10時 神輿渡御(みこしとぎよ) 明治13年から飾り付け(巻藁舟)
 - 9間半(17メートル)の真柱 月数12個の提灯
 - 巻藁台(坊主と言われる) 日数400個の提灯
 - 屋形の前方(なべつる) 月の日数30個の赤提灯
 - 屋形の上部に軒提灯を、屋形中段の四方には赤提灯を48個
 - 午後8時45分
車河戸から天王川の丸池へ
当番車は上陸して、御旅所の神輿に参拝 後の舟も上陸し神輿に参拝
巻藁舟は「御旅所」へ戻る
- ※江戸時代(尾張藩)車屋は瑠璃小路にあった尾張藩主・佐屋代官所らが

いる 棧敷でお目見え

巻藁舟は「車河戸」に戻り、夜通しで車楽舟に 飾り替え

市江舟は星宮（愛西市西保町）で試楽

・朝祭 市江舟と津島五車（車楽舟）

- 午前6時 屋台起こし 屋形の上に屋台を置く
市江舟 唐破風屋根、「神君様御寄付物」（家康に頂いた着物）の立て札
- 午前8時40分「お迎え」
- 午前9時 市江舟を先頭に津島の車楽舟が丸池へ
市江舟の銚持（10人）が川に飛び込む
一番銚（銚持が舟首に立つと、大きな柄杓で水を2回かけられる 古式泳法で御旅所へ）
二番銚～十番銚 御旅所（神輿）へ参拝 神社へ
一番銚・二番銚 神社の社務所へ
三番銚 楼門前の反り橋に張られた注連縄を切る
社殿前へ奉獻
四番銚～十番銚 社殿前へ奉獻 全員が社務所で直会
- 午前9時45分 市江舟、着岸 御旅所参拝 紅白の梅花と神酒を献じる
津島五車 着岸 御旅所参拝
- 午前10時30分 神輿が御旅所から神社へ渡御
神輿の後ろに、市江・津島五車（米之座・堤下・筏場・下構・今市場）の児（ちご）、囃子方、車屋が続く
津島神社で市江と津島の当番車が神前で奏楽、児盃の儀式、境内の宮詣り、車楽舟へ戻る
「山おろし」置物や飾り物が降ろされ、屋台・屋形が舟から降ろされる。

（4）織田信長と尾張津島天王祭

- ・津島湊（川筋の湊町） 伊勢の桑名、尾張の熱田、知多半島の大野と結ぶ湊
- ・入津料（通行税）が多額、土倉（質屋）が発展 『信長の台所』
- ・弘治4年（1557）「天王橋」の上で祭りを見学した記録
天正10年（1582）「本能寺の変」 14日、すぐるま（飾り付けなし）

（5）その他の武将と尾張津島天王祭

- ・豊臣秀吉 津島牛頭天王社の楼門を寄進 秀頼が「南門」を寄進
- ・松平忠吉（家康の息子）の妻（政子） 津島牛頭天王社の本殿
- ・江戸時代の幕府・大老や老中 堀田正盛の一族（四家七苗字の一軒）
関東地方の津島牛頭天王社の普及に貢献